

『教行信証』にあらわれた「魔」の意味

神 戸 和 磨

一

『教行信証』のなかに「魔」についてよく魔波旬、魔行、魔軍、四魔という言葉が使われている。仏道とはもともと魔との戦いであり、魔の降伏に仏陀正覚の一念はある。そのことは『大経』に、

大光明を奮ひ、魔をして之を知らしむ、魔官属を率い来り逼め試む。制するに智力を以てして皆降伏せしむ。

光明普く無量仏土を照らし一切世界之種に震動す、總じて魔界を摂して魔の宮殿を動かす、衆魔慄怖し帰伏せざるは莫し。

と、そこには仏陀の涅槃界（光明）と地上の無明界（魔）の質的対極をあらわしつつ、仏陀の正覚は、ついにその魔が降伏した決定的な勝利からはじまっている。その意味では、仏道の真理性は魔が克服された勝利の事実からの展開といえる。その点は『仏本行集経』において詳しく示されている。

二

仏と魔——、いま仏陀の正覚が光明として魔の降伏をあらわすとき、そこには私たちの歴史、時間の地平を唯一に（魔波旬）と照破する、超越的基点からの否定の力が真理への意志、行としてある。法然はその仏道の行について、「おおよそ仏教多しといえども、詮ずるところ戒定慧の三学をばすぎず。いわゆる小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるにわが身は戒行において一戒もたもたず。禪定において一をもこれを得ず。智慧において断惑証果の正智を得ず」（『和語燈録巻五』）と、端的にそのことを示している。三学とは戒を保つことにおいて三昧に入り、四諦、縁起の観を究め、迷い（生死）から悟り（涅槃）に到る実践（行的智）であり、そこにおいては（生死）の時間的、歴史的関係が戒定慧において区別即統一的に保たれていたのである。だが、仏陀なき後、戒定慧の仏道の中心点が失われるとき、もはや戒は真理（超越界）として地上を照射し否定する

真理自体を映す働きを失い、いつの間にか人間を拘束する嚴格主義の律法となり、また定と慧は観念的な言語の事柄になつてしまつたといえる。なぜならば、正法時、仏陀による戒定慧の身証があつたときは、そのこと自体が真理の証しにほかならなかつた。だが仏陀なき後においては、戒、定は慧に到る方法、慧は戒、定によつて到つた目的として、その関係はもともと一つであるにもかかわらず兩極に切り離れてしまつた。いい換えれば、戒は戒を修するために、いかに修するかとそのことに自己目的化してしまい、もはや仏道への通路ではなく、かえつて仏道を塞ぐものになつてしまつたといえる。つまり持戒、破戒、無戒の行為形式のみに固執し、「涅槃印の爲に印せら」(『末法灯明記』)れてある真理(ダルマ)と歴史の原關係を見失つてしまつたのである。

キェルケーゴルが『キリスト教の修練』のなかで、教会の頹廢を問題にしつつ、「道の意味での真理」と「結果の意味での真理」ということを問題にしているが、いま仏教においても仏陀なき後、仏道は「道の意味での真理」ではなく、「結果の意味での真理」に固定化し、ドグマ化されてきたといえる。その固定化されてきた仏道は、正法末の時間において、そこに自己の現存在する時機を問い、新たな真理の地平を開いてくる。『末法灯明記』(「化身土巻」本)では

将来末世の名字の比丘を世の導師と爲す。若し正法の時の制文を

『教行信証』にあらわれた「魔」の意味(神戸)

以て末法の世の名字の僧を制せば、教と機と相乖き、人と法と合せず。

といい、次に『四分律』を引用して、「非制を制せる者は、是れ則ち三明を斷ず、記說する所是れ罪有り」と、ここにはまさに戒が戒のために自己目的化され、本来の仏道の生命(三明)を斷ずるものになつてしまつた、形骸化した仏教への批判と告発がある。

さらに、『末法灯明記』のなかで、仏道実践の戒慧を失つた像法について次のように記している。

次の像法千年の中、初の五百年には、持戒漸く減じ破戒漸く増さん。戒行有りと雖も、証果無し。故に『涅槃』の七に云はく迦葉菩薩仏に白して言さく、世尊、仏の所説の如きは、四種の魔有り、若し魔の所説及び仏の所説、我当に云何してか分別することを得べき。諸の衆生有りて魔行に随逐す、復仏説に随順する者あり、是の如き等の輩復云何が知らんと、仏迦葉に告げたまはく、我涅槃して七百歳の後に、是れ魔波旬漸く起り、当に我之正法を沮壞すべし。

ここに正法時の戒定慧の実践、真理への意志と行によつて、地上に嚴存した否定の一点が何であつたかを知る。それはわれわれの歴史、時間の地平を(魔波旬)と照破する超越的基点からの働き、人間の努力とか行為によつて所有されることのない真理の光、否定の一点である。(魔波旬 marāṅgi-

『教行信証』にあらわれた「魔」の意味（神戸）

二八八

maṇi, māra は悪魔——mareti（殺す）の名詞化せられたものであり、殺者・奪命・能奪者とも訳される。pāpimant は波旬——pāpa（悪き）の名詞であつて悪を行なり者の義である。⁽³⁾

三

その「化身土巻」本の『末法灯明記』引意の課題、それは「化身土巻」末の最初に、

夫れ諸の修多羅に拠りて真偽を勘決し、外教邪偽の異執を教誡せば、

『涅槃經』に言はく、仏に帰依せば、終に更其余の諸天神に帰依せざれと。

『般舟三昧經』に言はく……

『大乘大方等日藏經』卷八「魔王波旬星宿品」第八六二に言はく……

と、ここに修多羅（覺者の言教）による真偽の勘決をもつて、仏に帰依することが魔の降伏にある内容を、「諸天神に帰依せざれ」「鬼神を祠ること得ざれ」「吉良日を視ること得ざれ」と、ここでは仏と魔とが對極性において、修多羅による真偽の勘決がなされている点に留意される。

「化身土巻」末の『大集經』の引意、それは『日藏經』の「星宿品」と『月藏經』の「諸天護持品」に中心おき、諸天とそれに統率された鬼神と日月星宿の人界護持が示されてくる。その梵天の世界は六欲天をもつて構成され、一番うえに

四大王（四天王）とその身内が住んでいる。四大王とは東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天、北方の多聞天（毘沙門天）である。『大集經』によれば、四王天は須弥山の四洲（東弗波提、南閼浮提、西瞿陀尼、北鬱單越）を護持する。第二の欲天は忉利天で須弥山の頂上の三十三天の住みかである。この天は四方に八都城があり、中央に殊勝殿の一都城があり、この四大王天と三十三天の世界は、いわば地上に住む地居天である。次に空中に住む空居天が四天あり、それは夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天である。さらに六欲天の上に四禪（初禪、二禪、三禪、四禪）、四無色定、定無辺処定、識無辺処定、無所有処定、非想非非想処定の八天において構成されている。

この梵天の宇宙構成は私たちの生が無に投げだされてある虚無性、いわゆる混沌と崩壊と闇黒にある浮動的、無定形のカオス状態にあることできず、一つの固定点をもつたコスモス（宇宙）の有機的構造をもつ存在論的中心にたつ世界観である。そこには天上の善趣への方向と下へ引く惡趣への方向においてある⁽³⁾。いま、魔とは私たちを惡趣へ引くところの働きといえよう。『教行信証』のなかで最もよく「魔」の意味をあらわす引用として、

魔は即ち惡道の所収なり（「化身土巻」末）、魔は煩惱によりて菩提を妨く、鬼は病惡を起こし命根を奪ふ。（前同）

といわれている。

いま、その魔の決定的な克服こそ、「仏に帰依する」という、「化身土巻」末のはじめの『涅槃經』の引証であり、さらには、天台の『法界次第』によつて、

一には仏に帰依す、『經』に云はく、仏に帰依せん者は終に、更へて其の余の諸の天神に帰依せざれと、又云く、仏に帰依せん者は、終に惡趣に墮せず、

と確認されている。その点、先の『大集經』の所引にかえてみると、『日藏經』の「念仏三昧品」と「護塔品」、および『月藏經』の「諸魔得敬品」等には、諸天の仏法に対する護持と諸魔の仏法に対する無障礙があらわされている。「護塔品」では、

時に魔波旬、大歡喜を生じ、清淨心を發して、重ねて仏前に於て接足頂礼し……世尊を瞻仰したてまつりて、心に厭足無し。

と、魔波旬の大歡喜をもつて、ついに真理の威力に屈した歡喜の世界があらわされている。「諸魔得敬品」では

四天を帝釈・梵天王に属して、護持養育せしめ、三宝種を熾然ならしめ、三精氣（地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣）を増長せしめたまひき……我五濁世に出でて、諸魔、怨を降伏し、大集會を作して仏の正法を顯現すと。

かように、梵天の宇宙構成は、浮動的、無定形のカオス状態にあることで、一つの絶対の固定点を求めたコスモス

『教行信証』にあらわれた「魔」の意味（神戸）

（宇宙）の有機的世界である。だが、いかに絶対の秩序あるコスモスの世界を求め願つても、私たちの生の謎は見通しがたい暗闇に包まれている。その存在の虚無が完全に越えられた、つまり暗闇が光となつた、私たちの人類に真に帰依するものが見開かれた一点に仏陀出現の意味がある。「時に魔波旬、大歡喜を生」する、それは、「無明の深夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、無碍光仏としめしてぞ、安養界に影現する」（弥陀和讃）、という、無明の深夜の歴史に安養界が開示された、そこにのみ仏陀出現の意味があり、その仏に帰依する念仏の道は、私たち人類のカオスの暗闇を破つた、光からはじまる仏道の展開にある。（詳しくは『同朋仏教』第9・10合併号に記した。）

1 キェルケゴール著作集17『キリスト教の修練』p.313

2 山本啓量著『原始仏教の哲学』p.51～52

3 金子大栄著『教行信証講読』「教行の巻」―魔に就いて―p.294